

505

ばかりの奉祝とあった。近頃いふ愉快な幹杯である。

二月十二日(金)

薩摩琵琶
聴く。

初六時、H AreaのRecreation Hallで薩摩琵琶大会が催されおかけ、出演者は一ヶ月程度の初心者諸君であって、お市と身者中、松浦、丹原、近海、馬橋等の諸君あり、九名の出演者中四名と共が売れ占めてゐる。皆初人並に大に同意しおちやつてのけたのは嬉しかった。先生は荒野昌平君といふソリヤトルでの知人であるが、彼氏の琵琶演奏は、極めて質的おちで、殆んど先生とは半ひ難う、未だ素人の域と脱し難い。それでもInterneeの事と先生に会ふから愉快といへる。

僕に取って、此処へ移動して以来、先月上旬迄の葬儀に参列のため、J Areaへおかけの以外は、K Areaの外へ足を踏みおしつたのは、これが初めて。即ち再演とか演奏とかいふ席、終りに聴いて居るおちは、エソラ以来最初である。実は仲途で冷えたせいでもあらう腹具合が悪く退却にいったが、お市の馬橋巨矢(肇城)が真井おちで我儘に最後まで踏ま留つた。同エリアの浅場及び中村(お市)西君とも同席する。最初からの意図だったが、以上の杯を調子で、白田君と一緒に

506

にさし上げた。

二月十三日(土)

丹原君の
手紙

昨日、丹原浅吉君の許へ友人から便りがあつた。其れに
依ると、Relocation centerに在る今君の子供達は、インター
ンとして収容されてゐる父の身の上につき極力案じて居る、
父からの手紙を毎日千秋の思ひを込めて待つかね、メール
ボックスに手紙が無いと非常に落膽振りで、母もとつて
は誠に涙ぐましいといふ。併し子供の希望として、如
何なる苦勞をしても、一家同棲に止つて母を以て父と
共に起居を実現させ度く、何処迄も両親に従ひ
苦勞を分かちたいと、執拗なる孝心の程と発露
して居る。子は凡ゆる犠牲と拂ひ両親に傳づき、
孝養に度いと言ひ、親は子の将来の爲め一時と忍び
遙に子を鞭撻し、敢て子との分居を甘受すると言
ふ。蓋し丹原君の子供の如きは、よく時流を認
識し米口の状況に對する判断を誤らぬと云へ
も過言ではなからう。

今に至つて、日韓の子は米口市民権をいふと云々
する場合では無い、大声俚耳に入らずに、戦後の
大勢は米口内に於ける minority race として、日韓人
及び日平市民が、どれ程騒いでも、元の立場に
還へる事は不可能に違ひない。今日はたゞに
断の一字あるのみだ、分岐点に右顧左眄して
徘徊をせしめる右氣の時代ではない。